



教育者・直木賞作家

三好京三

三好京三は、旧衣川小学校大森分校などの教育実践に努力した教師であり、また、直木賞を受賞するなど数々の作品を残した作家である。

三好京三（本名 佐々木久雄）は、一九三一年（昭和六年）、前沢町に生まれた。「俺は小説を書いて愛と友情と平和の素晴らしさを日本中の読者に訴えたい。」と心に決めたのは旧制中学二年の夏でした。太平洋戦争の終戦から十日ほど経っていた。

京三は、前沢から汽車で一関の旧制中学校に通っていた。その中学は、終戦後の六・三・三の学制改革で、県立一関第一高等学校になり、その二年生に編入された。

京三は、家が裕福でないことは分かっていたので、自分で働いたお金で大学に行こうと考え、高校を卒業すると、町の役場に頼んで日雇いの人夫（土木作業や荷物の運搬などで働いて賃金を得て生活する人）になった。三か月ほど経ったある日、九戸郡の種市町にあ

る中野小学校（現・洋野町立中野小学校）で助教諭として京三を採用する話が来て、一九五〇年（昭和二十五年）、小学校教員になった。翌年の三月に中野小学校の同僚の佐々木京子と結婚する。その時京子は二十一歳、京三は十九歳でした。宿戸小学校（現・洋野町立宿戸小学校）に転勤してから、岩手日報社発行の公募文芸誌『北の文学』に小説「聖職」が入選して掲載された。その時のペンネームは笹原耿二である。その後『北の文学』に小説「断崖」や「返礼」などを発表する。ペンネームは原耿之助と変えた。

教育と小説に熱中していた京三は歌も得意であった。作曲家・安藤睦夫の直伝で『正調・北上夜曲』を教わってからは、機会があるごとにそれをひろめていった。そして、岩手日報の小編小説のページに、小説『正調・北上夜曲』を発表した。

一九六二年（昭和三十七年）四月、京三と京子夫婦は胆沢郡の衣川村にある衣川小学校の大森分校に転勤した。学区の児童、住民、自然にほれこみ、以後十四年間在職する。大森分校は僻地（都会から遠くはなれた田舎）三級に指定された山の中の小さな分校で、授業は一年生から三年生までと、四年生から六年生までの複々式（二年以上の児童からなる学級）で行われていた。京子が低学年を、京三が高学年を受け持った。

授業を始めて、子どもたちに漢字を読む力をつけなければならぬと考えた。京三と京子は、画用紙を四つ切にしたカードの一枚一枚に、フェルトペンで一年生から四年生までに習う漢字の単語を書き、そのカードを学年ごとに、廊下に張った針金に洗濯ばさみでとめ、登校時と下校時にカードを最初から順序に読ませた。京三はそれを「漢字の関所」と名づけた。たちまち、子どもたちは漢字が読めるようになった。

京三は、子どもたちの話すことばに、おかしな「ふし」があることも気になっていた。毎朝行う朝会で、教科書や詩を朗読する時間をもうけて、その「ふし」を直していった。こうして、子どもたちはどこへ行ってもおどおどしない、たくましい子どもたちに育っていった。

京三は勤務すると、すぐに『三つの輪』という分校だよりを発行して、親と子どもと教師とが心と力を合わせて教育に取り組むことを目指した。春には子どもたちを大森山に連れ出して山菜を採り、秋にはきのこを採らせた。夏には親子遠足を企画し、大型バスで海水浴に出かけた。運動会や学芸会は学区民の全員が出るお祭りであった。婦人会の仮装行列は運動会で人気を呼ぶ出し物だったし、学芸会での劇は先生と子どもたちの総出演で、さらに婦人会の劇も

あった。脚本はすべて京三が書いた。大森分校はこうして今まで以上に活気に満ちた学校に変わっていった。

一九七〇年（昭和四十五年）、大森地域も過疎化がすすんで、一時は四十名もいた分校の児童数が十五名に激減した。なんとかして活気を取り戻そうと、当時の農民教育長と言われた小坂盛雄氏に頼んで、子どもたちに郷土に伝わる農民の芸能である「御神楽」を傳承させることにした。放課後や休日になると練習が続けられ、子どもたちは汗びっしょりになりながら体得していった。運動会で初めて披露された時、地域の大人たちは感動して涙を流した。「御神楽」がテレビで紹介されると各地から習いたいという人たちが大森分校を訪ねてくるようになった。

僻地分校の教育実践にのめりこんでいた京三は、京子の勧めもあり、教師の資格をとるために慶応義塾大学文学部の通信教育を受けた。苦勞と努力を四年間続けて、無事卒業した。

京三は、このままでは小説家になるという自分を励まし支えてきた京子に顔向けができないと思った。京子に「俺はこれから文学の勉強をやり直して、四十五歳までにはきつとどこかの新人賞をとるかな。」と宣言した。一九七五年（昭和五十年）三月に『小説新潮 新人賞』に応募した作品「兎」が最終候補に残ったが落選した。十

月に大森分校を舞台にした小説「子育てごっこ」が『文学界新人賞』を受賞した。ペンネームはその後「三好京三」で通じた。また、僻地教育の業績顕著（ぎわだつて目につく）により「岩手県教育功労賞」を受賞した。

一九七七年（昭和五十二年）二月、小説「子育てごっこ」が第七十六回「直木賞」を受賞した。「直木賞」を受賞すると急に忙しくなり、作家活動に専念するために、一九七八年（昭和五十三年）三月、京三は真城小学校（現奥州市立真城小学校）を最後に退職した。四十七歳であった。

以後は、作家活動に専念する。「直木賞作家三好京三」として本格的に創作活動を始め、数々の作品を残した。京三と京子が永年勤務した大森分校は、その後も入学児童がいなかったために、二〇〇〇年（平成十二年）三月に閉校した。一九八九年（平成元年）に一関市の「文学の蔵設立委員会」会長に任命され、一九九七年（平成九年）には「岩手日報文化賞（学芸部門）」を受賞した。

三好京三は、二〇〇七年（平成一九年）五月十一日、脑梗塞のため県立胆沢病院で亡くなった。七十六歳であった。



旧大森分校の校舎
「衣川ふるさと自然塾」「三好京三記念室」



旧大森分校の講堂に飾ってある

*三好京三についてもっと詳しく勉強したい人は、衣川区にある「衣川ふるさと自然塾」を訪ねてみてください。『子育てごっこ』の舞台となった旧大森分校の校舎・校庭・講堂があります。分校職員室には「三好京三記念室」もあります。

*参考文献

『銀の色空の色 直木賞作家 三好京三とその世界』
編集委員会 編 ほくどう通信社
『野の色空の色』